

巻 頭 言

越谷 重夫 (こしたに しげお)

(千葉大学 理学研究科, 「数学」前編集委員長)

数学屋になって四半世紀(30年という説もある)以上が過ぎた。結構長い年月である。最近, 以前にも増して数学が非常に面白くなってきた。ここ10年くらい前から特にそう感ずる。「時, 既に遅し」の感もあるが, 私の回りには, 恩師 H. T. 氏を初め, 共著論文もあるアメリカ人 M. H. 氏その他アメリカの女性数学者も含め, 70才代の数学者で, 新しい結果を出して論文を書くことに対して, 非常に意欲的な人が何人もいる。このような素晴らしい実例を見て, あと20年くらいは現役で論文を書き続けたいと願っている。

現在勤務している大学で, 大学院の学生指導に携わってから20年経つ。博士号取得を指導した学生は約10名, そのうち約半数が大学の永久職に就職している。それほど多い訳ではない。しかしながら, これら元学生である人たちは皆, 文句無く素晴らしく優秀である。皆, 世界第一線で活躍している数学者である。私のような平凡な数学屋の下に, よくこんなに優秀な人たちが集まって来てくれたものだ, と驚くばかりである(ちなみに, 3分の2以上は, 違う大学の学部出身者である)。したがって, 現在でも常日頃, 彼女ら彼らから, 数学研究上の多くのことを学んでいる。それだけが理由ではないが, 研究者の卵たちに, 何とか立派に育てて欲しいと願っている。

その実例を挙げる。イギリス, ドイツ, フランス, アメリカ合衆国などの各大学を訪問して, セミナー, 談話会などで講演をする機会がときどきある。そのようなイギリスのセミナーの一つに BLOC (Bristol, Leicester, Oxford Colloquium) がある。3つの大学が合同で, 年に数回不定期に開いているセミナーで, 参加者は5-7大学から来ている。このうち後半の2大学の責任者は女性数学者である。その一人である, Leicester 大学 N. S. 氏(女性)の話によると, このセミナーの経費は, すべてロンドン数学会から

来ているとのこと。そして、その報告および費用請求には、大学院生、ポストドック (PD)、および女性研究者の人数を記入することが必要で、この3つの分類に入っている人たちへの援助が重要とのことである。ロンドン数学会が若い数学者、女性研究者を積極的に援助していることがわかる。わが国でも、日本数学会がつい最近、学生の年会費を値下げしたことも、一部これと同様の主旨であり、大変喜ばしい。

大学院生たちを一人立ちできる数学者に育て上げるのはなかなか大変であり、一朝一夕にできるものではない。いや「育て上げる」などという傲慢な言い方はそぐわない。指導教員がすべきことは、大学院生たちの良い点を見つけ出し、そして引き出し、それらを十分に伸ばすように手助けすることなのであろう。つまり、触媒のような役割に徹することが一番良いのではと確信している。このためには、研究のための環境を整えること、例えば、機会があれば可能な限り、国内国外から一流研究者を招待して、大学院生たちが直に研究の話聞く機会を設けることである。それは談話会だったり、1週間の集中講義だったりする。たったこれだけの、ほんの短期間のことでも、大学院生たちの研究に対して、決定的な役割を果たすことが、頻繁におこる。しかしながら近年、この少額な、しかしながら大変重要な予算が、どんどん削られていくのは、残念至極である。これらに十分な費用を充当しても、その金額など実験系の分野に比べれば、はるかに少ないし、また長い時間的幅 (スパン) で考えれば、その効果は抜群である。結果として、わが国の教育に、したがって国益に大いに役立つと思うのだが。

今後も、周辺の若い研究者たちから刺激を受け、そして教わりながら、数学をすることを大いに楽しませてもらうつもりでいる。彼女ら彼らに迷惑をかけていることを自覚しつつも。